

メッセージアウトライン

創世記 1:14 ~23 「創造の第四日と第五日」

[14-19]「神は仰せられた。『光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ』そのようになった。神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。夕があり、朝があった。第四日」

創造の第一日に神は「光(オール)」を創造され、第四日には「光る物(マオール)」を創造された。これはまず、本質的な光を造り、その後で光の発生源を造られたという順序である。最初の三日間の光と第四日目に地上を照らした発生源の主な目的は「光とやみとを区別する」(1:4,18)ためこの二つの光の役割は本質的には同じであった。しかしこの四日目の光はさらに「しるしのため、季節のため、日のため、年のため」の役割も与えられた。それは後に造られる人間の生活に役立たせるためであった。そして「季節のため」とあるので、このことは地球が創造された時にすでに現在と同様に地軸は公転軸に対して傾斜していたことを意味する。これによって春夏秋冬が生じる。「大きいほうの光る物」とは太陽、「小さいほうの光る物」とは月のことである。神はまた星を造られた。全天に輝く星は大宇宙の広大さを思わせ、現在地上で観測できる星の光は何億光年のかなたより飛来したものもあり、それゆえ宇宙の年齢は古く、地球の年齢も星や銀河の進化と同様に古いと考えられている。しかしそれはビッグバン宇宙論等の学説に立って導き出されたもので仮説に過ぎず、今までだれも星や銀河の進化や変化を直接観察した者はいない。神が創造の週に用いられた過程は、現在起こっている過程ではなく「創造と制作の過程」であったことを覚えておかなければならない。神はすべてを完成された状態に創造されたのである。神が星(天体)を造られたのは創造の週の第四日目であったが、その時に全天の星の光が地を照らす状態で創造されたのである。私たちの知識が及ばないことが神の手による創造を疑ってよい理由にはならない。→詩篇 147:4~5,イザヤ 44:24,ヨブ記 38~41 章

[20-23]「神は仰せられた。『水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。』神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。神はそれらを祝福して仰せられた。『生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。』夕があり、朝があった。第五日」

神のことばによって水は突然おびただしい生き物の群れで満たされた。ここで「生き物(ネフェシュ)」ということばが初めて出てくる。このことばは「たましい」とも訳されることばで、しばしば人のたましいと動物の生命に用いられている。生き物は植物が単に地から生じたようではなく、意識を持ったものとして新しく創造される必要があったのである。意識というものは単に基本的

物質の複雑な組み合わせだけでできるものではない。そして鳥も地の上、天の大空を飛ぶものとして創造された。また「海の巨獣(タニン)」とは竜とも訳されることばで今は絶滅してしまっている恐竜やすべての大きな海生生物のことを指すと思われる。

この箇所ですべての動物の種類は水の中と空を飛ぶすべての生物を含むものだったのであろう。それらは種類に従って造られた。神はそれを見て良しとされた。そしてそれだけではなく神は創造された動物に海に、また地の上に増え広がるようにと祝福を宣言された。

人間のように神の愛の対象ではなかったけれども、神の守りと顧みの対象であり、神の許しなしには一羽の雀さえも地に落ちることもなく(マタイ 10:29)、また神は彼らを絶えず養ってくださる(マタイ 6:26)。このような祝福のもとにすべての海生生物と鳥は間もなく世界のあらゆる所に増え広がることになる。夕があり、朝があった。これが神による第五日目の創造であった。

また、創世記 1 章に記されている創造の順序と進化論が教えている順序が異なっていることは明らかである。進化論ではまず海生生物が最初に発生し、次に陸生生物、その後、鳥の順に進化したと述べている。しかし、この創世記では陸生植物が最初に出現し、その後、海生生物と鳥が同時に出てきたと述べている。さらに、どちらかと言えば、単細胞生物やプランクトンのような小さなものではなく、最も大きな海の動物(巨獣)が初めに記されている。これはまた進化の学説に反するのである。

科学が進み、人間の知恵によって多くのことが解明されてきたが、そこには進化論などの多くの仮説に立ったものがあり、神の存在を否定し、不信仰と人間中心のヒューマニズムに至らせるものが多い。前述したが、「私たちの知識が及ばないことが神の手による創造を疑ってよい理由にはならない」ことをよく覚えて、私たちは神に従う者とならなければならない。

→ II テモテ 3:16